

散歩

濱田湧壮（熊本大学）

時計の針が頂点で重なった時間。

帰りの電車で、マツクの袋を抱えた男を見かける。

家族のために買ったのだろうかと思う。

誰かのために何かするときの笑みを浮かべている。

降りる駅が同じだったので、僕は男に付いていく。

角を曲がる背を追っていく。

男は僕より歩くのが速く、それは身長とか慣習とかの問題じゃなく、たぶん目的の問題だった。

男との距離は徐々に開いていき、僕は途中で立ち止まる。

家に入ると男は、妻と小学四年生になる息子がいないことに気づく。

ちょっとした買い物に出ているんだろうな。

待っていてもなかなか帰ってこなくて、ポテトが冷めはじめ、コーラの炭酸が抜けていく。

妻と息子は三十分ほどで戻ってくる。

二人でジムに行っていたのだが、帰りのバスが遅れたのだという。

シャワーを浴びてくると浴室に向かった妻を

男は立ち上がって追いかける。

何か、そういうタイミングだったのだろうか。

僕はそのまま一人暮らしの部屋に帰る。

服や書類や本で足の置き場がないくらい散らかっている。

僕は右足首を捻挫して

いつもより慎重にベッドに向かう。